



「黄昏の街」千葉繁明

丹精の茄子玉葱の薄衣 爽風

分けてもらった採れたてのつやつやと青く活きのいい茄子と薄皮に包まれた玉葱には、素朴な美しさと、嬉しい善意が。

「例会」について7月11日幹事会での検討と決定

1. 例会の「登録会員」制度は平成19年9月以降撤廃する。
2. 夕食会は当面廃止する。
3. 昼食会は従来通り隔月で行うが、開催日を原則第4木曜日とする。
4. 昼食会の出席者は出席の旨を木村さんまで連絡する。

夕食会は出席者が少ないので暫く休みますが、忘年会や花見など季節の節目々々で開催することも考えられるので、その場合は事前に案内します。

「登録会員」制度は無くなったので、今後は「欠席です」の連絡は不要となります。出席の連絡は木村さんの他、加藤、大久保、両副支部長の何れかにでも可とします。

“ケヤキ並木をもっと誇ろう” 川口直樹

仙台市青葉区のケヤキ並木を歩くと、まるで大聖堂の中にいるような錯覚に襲われる。

緑の^{てんがい}天蓋から差し込む木漏れ日は、内陣の奥壁の高いステンドグラスから薄暗い堂内に流れ込む光のよう。

五月の若葉のころから晩秋の落ち葉の降るころまで、仙台では青葉通と定禅寺通の二つのカテドラルを歩くことができる。

何年前か前、四国でいくつかの街を歩いたことがある。殴りつけるような太陽の暴力の下で、木陰を求めても、シュロのような背の高い街路樹のこずえにはわずかの葉が風にそよぐだけ。犬のように舌をあえがせ

ホテルに戻るしかなかった。ここでは、真夏の日中に通りを歩く人はいない。

他県から仙台を訪れた知人は嘆息を込めて、ケヤキ並木を褒めそやす。杜の都のいわれはケヤキ並木ではないけれど、今ではこれが仙台のシンボルになっている。

ただの並木では駄目で、空を覆いつくすように枝を張るケヤキでなければ、駄目なのである。

お国自慢は、ときとして聞き苦しいけれど、このケヤキ並木はもっと誇っていいのかもしれない。

(8月1日河北新報「声の交差点」に掲載)

「無財の七施」 葛西 洋一

会社を退職する頃、今後何をしようかと考え、色々と資料を集めた際ぶつかった言葉の一つに「布施」＝「喜捨」があり、ご存知の方もあろうと思うが面白い面もあったのでご紹介したいと思います。

布施というのは本来仏教用語で「金銭や品物を施しすること」ですが、それが無い場合でも「無財の七施」が出来るというものです。即ち、

- (一) 眼施・・・温かい眼差しを布施すること
- (二) 和顔悦色施・・・やわらいだ顔、喜びの顔色の布施
- (三) 名言布施・・・言葉による布施。すなわち優しい言葉、穏やかな話し方の布施。
- (四) 身施・・・身体による布施。つまり労働奉仕。
- (五) 心施・・・思いやりの心を布施すること。
- (六) 床座施・・・満員電車などで座席を譲ること。
- (七) 房舎施・・・人を気持ちよく宿泊させてあげること。

実は「田舎に泊ろう」というテレビ番組を見ていて、ふと思い出して資料を捜し出してきたのですが、「相手を軽蔑する気があってはその施しは布施にならない。老人に席を譲っても、年寄りが可哀相だから座らせてやるといった考えではいけない。布施した方がお礼をいう気持ちになった時、それが本当の布施である。」というのですが、色々と事件が多い今の世の中、仲々実践は難しそうです。

9月の行事

	支 部	みちのく損保
9月6日(木)		ゴルフ：花の杜
8日(土)		麻雀
10日(月)		釣り大会
12日(水)	二水会5時	
13日(木)		囲碁大会
14日(金)		歴史探訪会 二本松
27日(木)	昼食会「しゃぶ禅」12時～	

昼食会：出席の連絡を9月21日(金)までに木村さんか幹事(副支部長)にお願いします。

ドライブ：初夏の道北 加藤徹三

旅行先で根城にしている札幌の街に、ニセアカシアの芳しい香りが漂う6月8日、一度は行きたいと思っていた最道北に向けて、2泊3日のドライブに出発しました。

まず札幌から道央道深川J経由で160kmを留萌まで走り、そこからサロベツ原野までオロロンラインを170km北上するのですが、道路が真っすぐなうえに、前にも後にも滅多に車がないのであまり距離を意識しません。若者なら一泊で充分そうな旅程を、途中の「道の駅」には全部こまめに立ち寄って物色し、しっかり水分を補給したり、出発前にしっかり小用をたしたりで、典型的な高年夫婦のドライブとなるわけです。

オロロンと鳴く海鳥の彫像は鳴かず飛ばずに天売島を見て

天塩川の河口に架かる橋を渡って10分ほど走り、長かった海沿いの道路と別れて右折すると、そこがサロベツ原生花園です。漸く初夏を迎えた湿原では、ハクサンチドリやハルリンドウなどの小さな花たちが、ノビタキやシマアオジの囀りの中で咲き初めていました。間もなく夏、湿原は見渡す限りのエゾカンゾウの群生にとって代わります。

歩いてはまた立ち止まる木道でアオジの囀りヒメシャクナゲの花

一日目の宿は、石油発掘中に温泉が発見されたという「豊富温泉」。褐色で石油の匂いがする不思議な湯です。

翌朝午前4時に、宿の窓から北緯45度の日の出を見ました。

二日目の道程は、湿原の先の日本海に浮かぶ利尻富士を左手に見ながら道道106号線を北上、ノシャップ岬、宗谷岬を廻り北オホーツクの“カニの町”枝幸^{えさし}まで。風景にみとれながら快適に走っていると、何ヶ所かに吹雪シェルターが見えて、やはりここでの真冬の暮らしを想像してしまいました。

緑なすサロベツ原野のその先に浮かぶ利尻の残雪を見る

稚内に入ると、右手の丘に大きなレーダー基地が見えてきて、道路わきに「自衛隊さんご苦労さん」という看板が目立つのです。北方では危機意識が違うのかどうか、ロシアは

近い国なのか遠い存在なのか、そこに住まないと良くわかりません。「北方領土」「だ捕」「カニ」そして「トカレフ」などのフレ-ズは、「サハリンが見えるぜ」と



いって喜ぶ遠来の無責任な観光客にとっては、別の次元の事になってしまうのです。

宗谷崎岬の北の水平線近くて遠い霞むサハリン



宗谷国道をクッチャロ湖のある浜頓別まで南下するドライブは、相変わらず車の少ない真っすぐな道路で、左がオホーツク海、右手には原野と放牧された牛、牛、牛、あとは何も無いです。それがいいのです。

猿払^{さるがはつ}で飲んだ牛乳は、蓋をとってもクリームが出口を塞いで中身が出てこないのですが、スプーンが用意されていて、かき混ぜると濃くて美味しいのです。キャンプ場が多いせいかバイクのツーリングがチラホラと。

開拓の人馬が拓いた荆道今その子孫のバイクが過る

浜頓別にあるベニヤ原生花園の目の前には、真冬のイメージとは別世界の、碧い凧いだオホーツク海が広がります。湿原を巡る1周3kmの散策路にゆっくり歩を進めると、厳冬にジッと耐えてきたミヤマキンポウゲをはじめ、ハマハタザオやヒメイズイなどの小さな花々がひっそりと咲いていて、湿原のそこかしこからコヨシキリの囀りが聞こえます。

オホーツク風温んでも花たちは丸く小さく寒そうに咲く



一泊目の豊富から二泊目の枝幸までは160km余り。今は高速道路では概ね60kmおき、一般道でも30kmおき位にトイレ休憩や「道の駅」があるの



で、路面や車の性能の向上と相俟ってドライブも随分楽になりましたが、楽に走れる分行き先を欲張り、慌ただしくなるのは望むものではありません。今回は晴天にも恵まれ、ゆっくり時間をかけて写真を撮ったり鳥の声を聞いたり、貴重で贅沢な旅だった風に思います。

枝幸からホタテ貝の町雄武^{おうむ}経由で67km南下すると興部^{おこっぺ}。廃線となった名寄本線を走った電車が、今は新緑の木立の中で動かずに停まっています。

タンポポに線路の跡は覆われて錆びたレールに電車が二両

この先、再び訪れることは無い最北端をなぞるドライブはここまで。ここから内陸に入り、



名寄、旭川、富良野経由で札幌まで約300km弱の道程をあちこち寄りながら、またゆっくり走ります。“真冬のオホーツクを見ずしてオホーツクを語るなかれ”と言われそうですが、いつでも蘇る景色は、走り繋いだ美しい初夏の道北なのです。 2007年7月